

## 私がご飯を好きな理由

宮崎県立都城泉ヶ丘高等学校附属中学校 二年 長瀬 里歩

ボウルにお米を四合入れて、水を満たします。お米一粒一粒が、跳ねるように水の中に踊り出します。私の手が入りくるりくるりとかき混ぜると、踊りはいつそう元気よくなります。白く濁った水を替えて、もう一度。それを何度か繰り返し、濁りがなくなったら炊飯器にセットして、今日の私の仕事が終了です。

私は、家のご飯を炊く役割を担っています。きっかけになったのは、私の地域でのお米に関する豊富な体験。続けているのは、父と母の笑顔があるからです。

「ほら、もう少しだが。頑張れ、頑張れ。」

「間隔は同じにせんね。狭いと稲が生長したらぶつかるが。」

おじいちゃん、おばあちゃんたちの声が飛び交います。それとかぶるように響く子どもたちの歓声。田んぼは毎年田植え、稲刈り、脱穀の時期ににぎやかで笑顔あふれる場所になります。私が住んでいる沖水地区。その小・中学生は、毎年高齢者の方々とお米作りを行っています。そして、私はそれに毎年参加しています。

毎年貴重な経験を重ねながら私が感じてきたこと。それは「農家の

方々の大変さ」。私たちは、田植え、稲刈り、脱穀という三回だけの参加です。しかし、農家の方々は一年を通して田んぼを管理しなければなりません。水の調節をし、雑草を取り、日照りや大雨、台風に備え、時期を見る。また、年にたった三回の参加でも、重労働だな、と思うことが度々ありました。収穫のときに、重い稲束を運ぶの一つをとつても、本当に大変でした。

「でもね、植えた苗がぐんぐん生長して、実っていくのを見るのは本当に楽しみだよ。」

とある高齢者の方が楽しそうにおっしゃるのを聞いていると、私自身も楽しくなってくるのが分かります。毎年の体験は、大変なこと以上に、楽しみや達成感がありました。

こうして多くの苦労と多くの楽しみを抱えて、私たちの食卓に「ご飯」はやってきます。地域での体験を通して、食卓にご飯があることの幸せについて改めて考えることができました。あの体験を重ねていなければ、私はご飯はあつて当たり前のものだと思っていたことでしょう。だからこそ、こうした体験をさせていただけの環境にいることに感謝します。

「ご飯よー。」

いつもの母の声。この言葉を聞くととてもうれしくなります。弾む心地で食卓に走ります。

「いただきます。」

茶碗に盛られているのは、私が炊いたご飯です。父と母をご飯を口に運んで

「最高のお米を、あなたが心を込めて炊いてくれたお陰で、とてもおいしい。」

と笑顔で言ってくれます。この言葉を聞くと、毎日お米を研いで炊飯器にかけるまでの手順に、いつそう心がこもります。

これからも、私はお米を大切に炊き続けたいと思います。そして、お米に感謝しながら、おいしくいただきたいと思います。

私は愛情を込められたお米が、ご飯が、大好きです。